

## 令和五年度入学試験問題

### 国語 (人文学部・教育学部・経済科学部・医学部・創生学部)

#### 注意事項

- 一 この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはならない。
- 二 問題冊子は、全部で二十四ページある。(冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合は申し出ること。)問題冊子の中に下書き用紙が一枚入っている。
- 三 受験する学部によって選択する問題が異なるので、左の表を見て、○印で指定された問題を解答すること。なお、問題ごとに学部の別が記してある。

問題(ページ)	学部				
第一問(一～八ページ)	人文学部	教育学部	経済科学部	医学部	創生学部
第二問(九～十二ページ)	○	○		○	○
第三問(十三～十八ページ)	○	○			
第四問(十九～二十四ページ)			○	○	○

- 四 解答用紙は、問題冊子とは別になっている。人文学部・教育学部は三枚、経済科学部・医学部・創生学部は二枚である。解答は、すべて解答用紙の指定された箇所に記入すること。
- 五 受験番号は、各解答用紙の指定された二箇所に必ず記入すること。
- 六 解答時間は、九十分である。
- 七 問題冊子及び下書き用紙は、持ち帰ること。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

科学はなぜ信頼できるのでしようか。信頼の根拠は、科学者たちが専門家集団として客観的な根拠をもとにしつかりとした議論を積み重ねているはずだと考えられるところに求められるように見えます。人文学も「人文科学」と呼ばれたりしますが、「科学」という言葉が「客観的な議論の積み重ね」を基礎とするものを意味すると、人文学は果たして「科学」なのか、という疑問がしばしば呈されます。例えば哲学などは、少なくとも一般的なイメージでは、それぞれの哲学者が「自分の考え」を述べるだけという向に話が積み上がらないものと考えられているように思います。そこには「進歩」という概念が欠けているというわけです。

「科学」はそうではなく、科学者たちが共同で客観的な知を積み重ねるものであって、そちらの方がよっぽど信頼できるといわれます。誰かが<sup>①</sup>シイ的に設定したルールの上に成立するものではなく、同じ知の基盤の上で客観的な議論を積み重ねているのだから、<sup>②</sup>シロウトがその内容の<sup>①</sup>シイについて専門的な知識をもっていなくても、十分に信頼できると見なされるのです。

科学者たちの現場にもう少し近寄って見れば、その信頼の基盤は、より強固なものになるでしょう。科学者が「科学者」として認められるには、専門研究でしつかりした業績を上げ、承認を受けなければなりません。論文を発表する専門誌は、ピア・レビュー形式を採るものがほとんどで、掲載の可否を決定するのはその道の専門家です。専門家が専門家としてきちんと評価できる論文以外は、科学者の「業績」としてカウントされません。この専門家によるチェック機能が、科学は信頼に足るといふ確信をより確かなものにしてくれます。論文の内容についてシロウトには判断できなくても、専門家が競争原理に基づいて互いにチェックしている体制があるのだから、信頼に足ると考えることができる、というわけです。

しかし本当にそうでしょうか。そうした「専門性」はなぜ無条件に信じられるのでしょうか。トーマス・クーン(一九二二―一九六

年)という科学史研究者の議論を参照してみましよう。ここでも歴史を振り返ることが重要です。今日私たちがよく知っている高い専門性に依拠した研究体制は、クーンによれば、科学のフヘン<sup>③</sup>的なあり方ではありません。それは「通常科学」と名づけられる特殊な様態だといわれるのでした。

通常科学とは、クーンによれば、すでに出来上がった「パラダイム」を前提にした上で展開される「科学」だといわれます。パラダイムとは、科学研究において科学者に共有されている規則や基準のことです。通常科学は、パラダイムを前提にした上での「パズル解き」にすぎず、それによって新しい考え方をもたらすことはないと言います。クーンは主張しました。こうしたクーンの議論は、一見すると「科学」に対する信頼を揺るがすダイタン<sup>④</sup>な批判のようにも聞こえます。あるいは単に悪意をもって外野から投げられるナイフのようなものにすぎないと思えるかもしれません。

しかし、クーンの議論は、科学者たちから現場をよく分かっているとして支持されました。クーンがいうことの方が、科学者の実態に近いと見なされたのです。もしそうだとすれば、専門外の人間は実際には何を信頼しているのでしょうか。クーンのいう「通常科学」の内実をもう少し立ち入って見ていくことにしましょう。

今日の科学プロジェクトは、しばしば大きなお金と大掛かりな装置を必要とします。しかし、失敗する可能性のあるものに思いついて大きなリソースを<sup>⑤</sup>さくことには、ふつうリスクが伴います。無駄になるかもしれないのに、そんなお金と労力が費やせるかというわけです。しかし、通常科学には、広い意味ではそのリスクは存在しません。巨額の装置の導入は「それを使えば重要な事実を見つけられる」とパラダイムが保証するから、研究者たちが取りかかるもの(クーン一九七一、二九頁)<sup>⑥</sup>になってくるからです。パラダイムを前提にする限り、こういう結果が出なければおかしいという「予測」があります。そのとき、パラダイム自体の正しさは前提になっていて、ギンミ<sup>⑥</sup>の対象にはなりません。

そのようなかたちでパラダイムの「正しさ」が確信されている状態であれば、どれほど巨額の予算をかけた実験でも決して無駄になることはありません。仮に実験結果がパラダイムの予測に合致しなかったとしても、「なぜそうなったのか」という新たな課題が見出<sup>みいだ</sup>されたと考えられるからです。予測と結果の不一致は、パラダイムを疑うことに向けられるのではなく、パラダイム上

の検討課題を増やすこととなります。そこでは実験の失敗もまた広い意味で科学の「進歩」に貢献したものと見なされるのです。

では、そのときの「進歩」とは、どういうものなのでしょうか。通常科学がパラダイムを前提にして浮かび上がる予測を実際に確かめるものとすれば、「答え」はあらかじめ与えられているとも考えられます。「答え」が与えられている問題を解くことは「進歩」といえるのでしょうか。「通常科学」が、あらかじめ設定された「答え」に辿り着くための努力である限りにおいて、それは「パズル解き」と同じだとクーンがいうのも、そのためです。ルールが設定され、解答があることを保証された問題を解く科学者は、問題設定に悩む必要がありません。彼らはただ、パズル解きの速さを競うだけです。だとすれば科学の「進歩」と呼ばれるものは、パラダイムを下絵にしたジグソーパズルのピースを埋めていくようなものになるでしょう。そこでは、下絵自体を書き換えることは想定されていません。ゲームのルール自体を変えれば、個々の科学者の研究の「意味」は宙に浮いてしまいます。ジグソーパズルのピースは、それだけでは絵をなさないのです。

かといってパラダイムの下絵がない状態で与えられたピースを組み上げることで何らかの「絵」をつくることができるかといえば、それも困難といわざるをえません。「科学者」になるための訓練に、そうした能力を養うことは含まれていないからです。「通常科学」の問題がパズル解きだとすれば「科学者」になるために必要なのは、パズル解きの訓練になります。より早くパズルを解く能力を身につけるには、パラダイムの正しさを検証して知を積み上げる訓練より、パラダイムを前提にした上で効率よく学ぶことを優先されます。実際、科学者になるための教育には主に「教科書」が用いられ、その分野を基礎づけるような独創的な科学論文が使われることはありません。基盤となる知をそれぞれの科学者が自分で確かめながら進むより、その正しさを前提とした上で系統的に学ぶ方が、学習効率が高いと見なされるのです。

しかし、そうすることで科学者は「そのパラダイムへの信頼を教えこまれ、それを換えよう」と志す科学者はほとんどいない」(クーン 一九七一、一八七頁)こととなります。こうした教育は、特定のパラダイムの枠組みを思考の型として嵌め込むものになるわけです。その教育は「しかし、通常科学研究、教科書の定める伝統の中でのパズル解きのためには、これで科学者とし

ての道具立てを十分与えた」(同頁)ことになります。科学の「専門家」とは、そうしてパラダイム自体を見直すことにかけては何の教育も受けていない人々を指すようになるのです。

「科学」への信頼の基盤は、専門家同士の相互チェックに見出されると先にいいました。しかし、そこでの「専門家」とは、特定のパラダイムを共有する科学者集団を意味しています。クーンがいうように、科学者たちは「個人の創造的仕事」が、自分の同業者に対してのみ向けてなされ、仲間うちだけで評価されるといような職業集団(同書、一八五頁)を形成します。その「仲間うちの評価」が、専門家同士の相互チェックと呼ばれるものの正体なのです。もちろん、科学者たちが馴れ合いで論文のシンサ⑦をしているということではありません。科学者たちはむしろ、通常科学のパズル解きの中で互いに競争しながら、互いの成果を評価しているといえるでしょう。

しかし、その高い専門性は、見方を変えれば、分野外の批判から専門家を守る働きをしているようにも見えます。その分野で前提にされる知の枠組みは、内部で問われることがないだけでなく、外部からの批判も受け付けないものになっているのです。通常科学の営みは、専門の枠組みに閉じることで効率化するような体制の中で行われているのです。

そうしたかたちでの知の蓄積は、パラダイム自体の変化に対する強い「保守性」を発揮することになるでしょう。パラダイムの上に積み重ねられた知は、パラダイムの枠の中で意味づけられるものですから、自分の研究の「意味」を失わせるような研究は容易に受け入れることができません。専門家間のピア・レビューのシステムは、この点に関しては、大きなマイナスとして作用するほかありません。自分たちの拠よつて立つ知の基盤を吹き飛ばすような革新的な論文は、「専門家」にとっては「とんでもないもの」としか評価できないのです。「科学者」としての業績が専門家間のチェックにのみ依存する体制を採る限り、そのような革新的な論文を書く人は最初から「科学者」として認められないことになるでしょう。

パラダイムを前提にした科学の「進歩」は、その意味で、パラダイム自体を変化させていく知のコウシン⑧をもたらすものへの本質的な反発をもつものになっているのです。

こうした知の閉塞は、科学が資本主義と接続することで強化されていきました。冷戦構造の中、国家の「科学技術」の向上が重視された時代には、無条件で科学にお金がかかる状況もありましたが、一九九〇年代以降、企業資本が科学研究を後押しする流れが出てきます。「パズル解き」の進展も、科学者のコミュニティの中で独立に進むものではなく、「お金になること」が求められるようになりました。

このことは、それまでは閉鎖的だった科学者のコミュニティが社会のニーズに開かれたものになったと評価できるようにも思えます。科学者の専門家集団が内部の相互評価だけで成立していた状況から離れて、外部の視点を取り入れはじめた、と。そうすることでパラダイム自体を見直す視点が出てくるかもしれないと期待する向きもあるでしょう。

しかし、実際には知の閉塞は、科学の資本主義化によっては解消されず、反対に著しく強化されました。まず第一に、科学の資本主義化によって、科学への信頼が専門家の相互チェックに<sup>⑨</sup>ユダねられる状況には変化がありません。専門家集団の外部から示されるのは「社会的・経済的なニーズ」であって、科学的な知自体への批判的な眼差し<sup>まなざ</sup>ではないからです。むしろ、科学の「進歩」は前提になっており、それゆえに多額の資金の投入も<sup>⑩</sup>キョウウされています。

他方でその資金の投入の目的は、科学の純粋な「進歩」ではなく「お金になること」になりました。科学者集団の中のパズル解きを目的とするのではなく、それを産業に結びつけることが求められました。「通常科学」がパズル解きを問題にする限り、専門家の数が増え、発表される論文の数が増えれば増えるほど、無条件的に「進歩」すると考えられます。科学の「進歩」とは、知のパズルのピースを埋めることだったからです。しかし、科学の「進歩」が経済の成長を目的とするものになれば、その成否を測る基準はパズル解きとは別に設けられます。それだけの市場価値をもたらしたのかということが、研究の成否を測る基準になるわけです。

研究の評価基準が変化すれば、当然のことながら科学者の研究の動機も変わってきます。科学者集団の相互評価だけが問題だったのが、経済効果の創出という観点で研究主題が設定されることになり、それが科学者の「社会的責任」と見なされるようになるのです。そうした評価基準の変化と無関係に、科学者としての「よい振る舞い」を考えることはできません。科学者集団の相

互評価が問題だった頃には、「科学者」として誠実な研究態度を採ることが科学者自らの存在理由に関わる重要なエートス（＝習慣的な振る舞い）でした。

しかし、資本主義が道徳的な「正しさ」を設定するものだったことを思い出していただきたいと思います。経済的な利益を高めることが科学者の社会的責任であるなら、統計処理に表面化しない程度の手を加えることや、都合のいいデータだけを用いて結果を出すことも、十分な「経済合理性」をもつ行為になります。専門家集団の間での相互評価が、それ自体で経済的な動機づけをもつようになれば、「真理の探求」などというお金にならないお題目を唱えることは「自己満足」以外の何ものでもなくなるわけです。

例えば、AIを用いた生産作業者の動作解析によって現場の作業ミスを防ぐという技術が先ごろ紹介されました。これは生産現場の効率を高めるため、現場作業者の様子を映像に撮ってAIで解析し、その作業を行うにあたって最適な動作とはどのようなかを明らかにする、という技術です（栗原 二〇一九）。この研究の「優れている点」は、実際の作業が行われている場面で映像で撮りながら最適な動作から逸脱した動きをしている現場作業者に警告を出せることにある、とされています。現場作業者に効率のよい動きをさせ、作業効率を高めるためにAI技術が活用された事例だというわけです。

こうした研究は、企業の経済的な利益に直結しますから、一面では「社会のニーズ」に応えるものだといえるでしょう。実際、企業担当者はこうした新しい技術に接して、その効果はいかほどのものか、自社にも応用できるかなどと、研究を重ねていくことになると思われます。

しかしながら、こうした研究は、経済的な利益をもたらすものではあっても、現場作業者の福祉に資するものではありません。AIによって動作をその都度矯正される現場作業者は、自分の身体を生産システムの一部に組み入れることを強制され、極端な不自由の中におかれます。心を無にし、身体を機械の一部として動かして時が過ぎるのを待つという労働形態がそこに実現することが容易に想像できます。現場作業者は、その職業を自らの「自由」において選択したのだといえ、雇用者の倫理的責任は免れるのかもしれませんが。しかし、少し広い視野で考えれば、職業従事者を徹底した管理のもとにおくことが、社会にとって

本当に「進歩」といえるものなのか、筆者には疑問に思われます。

ひとつの極端な例を見ました。しかし、それでもこの例は、研究成果の評価が経済的な利益を基準にすることで起こる視野の狭<sup>さく</sup>窄の可能性を示しているように思えます。経済的な利益が出ることで研究が評価されるのであれば、研究者もまた、その目先の目的を達成するために最適化した行動をとることになるでしょう。何らかの倫理的なガイドラインを設けることはできても、そもそもの研究の動機に、広い視野での社会的な「正しさ」の実現が含まれていなければ、科学の「進歩」の行く先は、経済的な利益に先導されることとなります。資本主義化した科学において知の閉塞は、単に解消されないばかりか、強化されることになるわけです。

(荒谷大輔『使える哲学——私たちを駆り立てる五つの欲望はどこから来たのか』による)

(注)

ピア・レビュー——研究成果を同分野の他の研究者が評価すること。

クーン 一九七一——トーマス・クーン著『科学革命の構造』(中山茂訳)のこと。

栗原 二〇一九——栗原雅氏が二〇一九年に、オンラインメディア「Jbpress Digital Innovation Review」に掲載した記事「人の「骨格」を見て、作業ミスでAIが即座に発見——生産現場の作業者の動作を解析する三菱電機の新技术」のハイパーリンク。

問一 傍線部①～⑩のカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部A「パズル解き」とはどのような行為をたとえたものか。本文中の「パズル」に関わる語を用いながら、八十字以内で述べよ。

問三 傍線部B「実験の失敗もまた広い意味で科学の「進歩」に貢献したものと見なされる」とあるが、なぜ貢献したといえるのか。本文の記述をふまえて百十字以内で説明せよ。

問四 傍線部C「知の閉塞」とあるが、これはどのような状況をあらわしたものか。本文に即して七十字以内で説明せよ。

問五 傍線部D「資本主義化した科学において知の閉塞は、単に解消されないばかりか、強化されることになる」とあるが、これはなぜか。「解消」の内容を明らかにしながら、本文に即して百五十字以内で説明せよ。

第二問 次の文章は、妻となるべき女性を探し求める主人公三位の中將が、さまざまな女性と会う次第を記した物語『窓の教』(室町時代成立)の一節である。読んで、後の問いに答えよ。

神無月のころ、降りみ降らずみ、さだめなきころは、なほつれづれもひとしほやるかたなく心すぎきをりしも、小侍従の君とて御乳母の姥の娘来たりて、「右大將どのの姫君、御年は二八ばかりにて御心深く、よろづなにこともなにも思し知りぬ。御かたち並ぶ方も侍らぬ」など、物語するを中將聞き給ひて、ゆかしく思し召し、小侍従の君をせちにせめさせ給へば、「女御に」と父大臣 <sup>B</sup> かしづき給ふなるが、母君あまたの中にまじらひ給はんことを、心もとなく思し召して、心ゆかせたまはず。その外いまださだまり給ふこともおはせず」と申せば、いろいろにそそのかして、小侍従仲立ちして夕月夜のほどに入れ奉りぬ。姫君を御覽ずれば、まことにいまだきびはにたよたよとして、如月の初風にもなびきぬべき柳の風情にぞ見え給ひけるほど、御心ざしたぐひなく、行く末永く変はるべき世の習ひまでもおくれじ、と契り給ふほどに、長き夜ながら明けやすく、御門に人多くて、立ち帰り給はんやうなくてこもりおはしぬ。①

されば今日は亥の子の祝ひとて、餅などとりどり奉り給ふに、父大臣もふとわたり給ふに、中將几帳のかけに隠れ給へる後ろ影を御覽じて、また、畳紙、帯などの散り乱れたるを御覽じて、いかめしく腹だたしくのしり給ひて、「人もゆるさぬ此の君を、めづらかにはひわたる者やある。女御にと思ふものを、誰にまれ天が下のうちに、我をおしてさやうのことはせらるまじ」など、おどろおどろしく叱り給ひて、夜ごとに人をつけてまばらせらるれば、また二度とも、言の葉のつてだに仲絶えて、夢にも通ふ道しなれば、あかぬ名残を互ひに忘れ形見にて、絶えはて給ふなり。② E

(『窓の教』による)

(注)

二八ばかり——「十六歳ほど」の意。

女御——きんぎょ後の位の一つで、中宮より下。更衣より上。

行く末永く変はるべき世の習ひまでもおくれし——「末永く来世まで共にと願う世の慣ならいにもひけをとるまい」ほどの意。  
亥の子の祝ひ——十月の最初の亥の日に、餅を食べて子孫繁栄を祈る行事。

問一 二重傍線部①「こもりおはしぬ」・②「まぼらせらるれば」について、それぞれの動作主を「」の中から選んで答えよ。

「三位の中將 ・ 右大將(父大臣) ・ 母君 ・ 姫君 ・ 小侍従の君」

問二 傍線部A「降りみ降らずみ、さだめなき」について、これが、読み人知らずの和歌「神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬の初めなりける」(『後撰和歌集』)に拠った表現であることを参考にしつつ、どの季節のどのような様子をあらわしたものが、簡潔に説明せよ。

問三 傍線部B「かしづき給ふなるが」を、現代語訳せよ。

問四 傍線部C「心ゆかせたまはず」は、「お氣が進まずにいらっしやる」ほどの意であるが、これは、誰の心情か。また、どのような理由によるものか。「お氣が進まずにいらっしやる」につながって一文が完結するように、本文に即して四十字以内で述べよ。

問五 傍線部D「如月の初風にもなびきぬべき柳の風情」とあるが、これは誰の、どのような様子をたどえたものか。本文に即して三十字以内で述べよ。

問六 傍線部E「絶えはて給ふなり」とあるが、具体的にどうなったということか。そのようになった理由も含め、本文に即して八十字以内で述べよ。

第三問 次の詩は、唐の王建が詠んだ「求友」と題する作品で、探し求める友人像と交際のあり方について、世間の実態と王建自身の見解が述べられている。これを読んで、後の問いに答えよ。（設問の関係で、返り点・送りがなを省いたところがある。）

鑑<sup>ミルハ</sup>形<sup>ヲ</sup> 須<sup>マチ</sup>明<sup>ニ</sup> A<sup>ヲ</sup>

療<sup>イヤスハ</sup>疾<sup>ヲ</sup> 須<sup>ツ</sup>良<sup>ニ</sup> 医<sup>ヲ</sup>

若<sup>ニ</sup>無<sup>クンバ</sup> 傍<sup>ニ</sup>人<sup>ヲ</sup> 見<sup>ルコト</sup>

形<sup>B</sup>疾<sup>ヲ</sup> 安<sup>ニ</sup>自<sup>ラ</sup>知<sup>ル</sup>

世<sup>ニ</sup>路<sup>ヲ</sup> 薄<sup>ク</sup>言<sup>フ</sup> 行<sup>フ</sup>

学<sup>ニ</sup>成<sup>リテ</sup> 棄<sup>ツ</sup>其<sup>ヲ</sup> 師<sup>ヲ</sup>

每<sup>ニ</sup>懷<sup>おもヒ</sup> 一<sup>ニ</sup>飯<sup>ヲ</sup> 恩<sup>ヲ</sup>

不<sup>レ</sup>重<sup>ンゼ</sup> 勸<sup>ニ</sup>勉<sup>ム</sup> 詞<sup>ことば</sup>

彼	我 <sup>D</sup>	甘 <sup>ン</sup>	苟 <sup>C</sup>	生	常 <sup>ニ</sup>	四	遂 <sup>③</sup>	朋	數 <sup>けう</sup>
道	言	与 <sup>ニ</sup>	能	死	慕 <sup>ヒ</sup>	海 <sup>ニ</sup>	作 <sup>ナシ</sup>	友	学 <sup>がく</sup>
我	彼	僮	成 <sup>ニ</sup>	不 <sup>ニ</sup>	正	争 <sup>ヒテ</sup>	名	道 <sup>ニ</sup>	既 <sup>ニ</sup>
無 <sup>レ</sup>	当 <sup>レ</sup>	僕 <sup>一</sup>	我	相 <sup>あひ</sup>	直 <sup>、</sup>	奔	利 <sup>、</sup>	日 <sup>、</sup>	不 <sup>レ</sup>
疑	信	随 <sup>ハシ</sup>	身 <sup>一</sup>	離 <sup>レ</sup>	人 <sup>ヲ</sup>	馳 <sup>ス</sup>	交 <sup>ハリヲ</sup>	虧 <sup>かク</sup>	誠 <sup>ナラ</sup>

永 <sup>E</sup> <sub>ク</sub>	各 <sub>ク</sub>	所 <sub>ハ</sub>	不 <sub>レ</sub>	亦 <sup>④</sup>	縦 <sub>た</sub> <sup>と</sup>	敬	終	以 <sub>レ</sub> <sup>テ</sup>	針
為 <sub>ニ</sub> <sup>サン</sup>	願 <sub>ハクハ</sub> <sup>ハ</sup>	貴 <sub>ブ</sub>	求 <sub>レ</sub> <sup>メ</sup>	貴 <sub>ニ</sub> <sup>ブ</sup>	令 <sub>ヒ</sub>	愛 <sub>シ</sub> <sup>テ</sup>	朝	石 <sub>ヲ</sub>	藥
後	貽 <sub>ニ</sub> <sup>ハ</sup>	去 <sub>ニ</sub> <sup>ル</sup>	立 <sub>ニ</sub> <sup>ツ</sup>	本 <sub>ニ</sub> <sup>ヨ</sup>	誤 <sub>ニ</sub> <sup>ル</sup>	当 <sub>ニ</sub> <sup>シ</sup>	拳 <sub>ニ</sub> <sup>ゲ</sup>	投 <sub>ニ</sub> <sup>ズ</sup>	及 <sub>ニ</sub> <sup>ビ</sup>
世 <sub>ノ</sub>	子	瑕 <sub>カ</sub>	名	相 <sub>ア</sub> <sup>ヒ</sup>	所	行 <sub>レ</sub> <sup>フ</sup>	善	深 <sub>キ</sub>	病
資 <sub>ト</sub>	孫 <sub>ニ</sub>	疵 <sub>シ</sub> <sup>ラ</sup>	声 <sub>ヲ</sub>	規 <sub>ニ</sub> <sup>ス</sup>	見 <sub>ヲ</sub>	之 <sub>ヲ</sub>	道 <sub>ヲ</sub>	池 <sub>ニ</sub>	源 <sub>ニ</sub>

(注)

数学——教えることと学ぶこと。

僮僕——召使い。

終朝——一日中。

規——忠告する。

瑕玼——道德上の欠点。

問一 傍線部①～④の読みを、送りがなの必要なものはそれも含めて、ひらがなで答えよ。

問二 空欄Aに入る漢字として最も適切なものを、次の「」から選び、その漢字を記せ。

「朝 鏡 珠 月 文 道」

問三 傍線部B「安自知」、傍線部C「苟能成我身」を、ひらがなのみを用いて書き下し文に改めよ。

問四 傍線部D「我言彼当信 彼道我無疑」を現代語訳せよ。

問五 傍線部E「永為後世資」は、永く後世の生きる指針にしようではないか、という意味である。王建はどのような友人を探し求めることを指針にしたいと述べているのか、本文に即して具体的に説明せよ。

第四問 次に示すのは、「先まわりする表現——理を超えた情」という小題をもつ文章である。これを読んで、後の問いに答えよ。

二〇二〇年七月十八日の『朝日新聞』朝刊(山形1)に「アマビエ」や「福うさぎ」／収束願ひ天童市に寄贈」という見出しの記事が載せられている。「収束」は新型コロナウイルスの収束であるが、記事には「縁起物は「アマビエ様&さくらんぼ福うさぎ」。手のひらに載るくらいの大きさで、将棋駒、真っ赤なサクラノボをあしらうなど天童らしさも演出した。手にした人が笑顔になれるようにと、アマビエを少しふつくらと仕上げたそうだ」とある。

「笑顔になれる」はもちろん「笑顔になることができる」ということだ。「アマビエ」は妖怪のようなものであるが、新型コロナウイルスの感染が広がる中で、弘化三(一八四六)年頃に作られたと思われる瓦版に描かれている姿が紹介され、広く知られるようになった。その「アマビエ」の姿があんまりかわいいとはいえないから、「少しふつくらと仕上げた」ということであろう。

「アマビエ」の顔をかわいくした、というのは「作り手」の判断で、その理由が「手にした人」すなわち「受け手」に喜んでもらいたいから、ということとはよくわかる。しかし、「受け手」がどう思うかは、「作り手」にはわからない。喜んだ結果、笑顔になるかもしれない。しかし、喜んだが、表情にはでない、ということだ<sup>A</sup>。受け手が「笑顔になる」ということが「作り手」の目標であるところ<sup>A</sup>が、少し「先まわり」<sup>A</sup>していないか、と思う。

「こんな状況でも楽しさや希望を見せられるような、笑顔になれることをやりたかった」(二〇二〇年七月二十三日『朝日新聞』朝刊)といった場合、自身が「やりたいこと」があつて、それをやった結果、他者が喜んでくれた、笑顔になった、ということではなくて、「やりたいこと」が他者が「笑顔になれること」ということになる。そういう目標が設定できるのだろうか。一万冊売れるような本を書く、ということでもない。一万冊売れるような本を書くためには、いろいろと考える必要があるだろう。多くの人が買いたくなるようなテーマを選ぶ、販売のための活動はどう展開すれば効果的かなど、さまざまな観点から検討することに

なるだろう。しかし、読んだ人が「笑顔になれる」本を書く、という企画がたてられるのだろうか、と思わずにはいられない。「笑顔になれる」はきわめて情緒的である。

スポーツ選手が「勇気を与える」と発言することがある。例えば「来季は新スタジアムでJリーグに参入します。宮崎の週末に元氣、勇気を与える場所にした」（二〇二〇年十一月三十日『朝日新聞』朝刊（宮崎1））や「画面越しに応援してくれるサポーターの皆さんに勇気を与えるサッカーをしたい」（二〇二〇年七月一日『朝日新聞』朝刊（佐賀1））などがそういう発言にあたる。

誤解のないようにいえば、いわんとしていることはもちろん理解している。ただ、スポーツであれば、ルールに従って試合をして勝つということが目標で、その試合を見た人が勇気を与えられた、と思うかどうかは見た人すなわち「受け手」の側のいわば問題であるのではないか。そしてそれは選手がコントロールすることでもないはずだ。練習の成果を十二分に発揮し、試合に勝つことを目指す。その結果勝つこともあれば負けることもある。そこまでが「選手側」側のことだから、その試合を見てどう思うかは「観客側」側のことだからであろう。もちろん観客に喜んでもらえるような試合をしたいと思うのは自然であろうが、「全力を尽くした試合」「試合の結果」を飛び越して、「観客が喜ぶ」ということを目指すというのは先まわりしすぎではないだろうか。

「全力を尽くした試合+試合の結果」を今風に仮に「コンテンツ」と呼んでみよう。そうすると「コンテンツ」よりも「受け手の情動的な反応」が前面にでてきているように感じる。こうした傾向が広くみられるようになっていないだろうか。テレビの視聴率や本の売り上げ部数は、「受け手の情動的な反応」ではないので少し違うだろう。しかし、新書などの企画を出版社の編集担当者や相談する時に、一万部は刷るのだから、まず一万部は売れるような企画でなければ、と言われることがある。そこには内容すなわち「コンテンツ」がおもしろいか、いいか、という話を飛び越えて「受け手の反応」がまずある。〈他人の心中を推し量ることを語義とする「ソインタク（忖度）」という語がある。内容や「理」よりも「受け手の反応」を考えるのは「過剰な忖度」ということになる。

言語表現に関していえば、「書き手」が「読み手」を想定し、意識することは必要なことでもあるので、それはいい。しかし過剰に「読み手」側に寄り添い、「読み手」側に先まわりすることによって、「書き手」と「読み手」との境界線が曖昧になることもある。

先に引用した「こんな状況でも楽しさや希望を見せられるような、笑顔になれることをやりたかった」という文では、「楽しさや希望を見せられる」「笑顔になれる」と二つの可能表現が使われている。「楽しさや希望」を(他者に)見せるのは発言者、笑顔になるのは(発言者以外の)他者で、それが一文の中にいわば溶け込んでいる。

「書き手」は「書き手」の立場と責任において「他者に伝えたい情報」をまとめ、整理して「読み手」に渡す。それが整理もそこそこに、「読み手」側のことをあれこれと考えていると、わたす情報がぐずぐずなものになっていく、というようなことはないだろうか。

「立場」は「視点」と言い換えてもよい。「書き手の視点」と「読み手の視点」が交錯してしまえば、その文はきわめてわかりにくいものになる。「書き手」と「読み手」とをつなぐ「回路」もなくなる。

右では、「受け手」が「笑顔になれる」ようなことを目標とするのは難しいのではないかということ述べた。これは言語表現についての話ではないようにみえるかもしれないが、そうではないと考える。「笑顔になれる」という言語表現が(ある程度にしても)定着しているから、それが口をついて出る。そしてその口をついて出た言語表現が思考や行動を規定していくということにみえる。こういうところに言語表現の問題が言語表現のみにとどまらないということがある。

<sup>B</sup>「やる気スイッチ」という表現がある。「聞蔵Ⅱ」で「やる気スイッチ」を検索してみると、一九九八年三月二十九日の朝刊に「選手」の「やる気スイッチ」が開幕までに「オン」になれば連覇が見えてくるし、今のまま「オフ」ならば、難しくなる」という記事があり、これがこの検索でヒットする、もっとも古い使用例ということになる。この記事ではプロ野球選手についての表現であるが、「息子のやる気スイッチを探す日々」(二〇一〇年七月二十七日『朝日新聞』朝刊)のように、子供について使われることが多い。検索でヒットしたのは、六七件だから、新聞紙面ではあまり使われていないようだが、筆者などでも何度も耳にしたことがあるから、「話しことば」では使われているだろう。子供に「やる気スイッチ」があるという発想は、(ロボットという語もすでに古いかもしれないが)子供をロボット扱いしていないか、とまず思う。そしてそのスイッチを親が押すと、子供は急にやる気を出す、というのも子供にとっては迷惑な話で、親にとっては都合のいい話ではないだろうか。「やる気スイッチ」という表現を言

われた子供がやる気をなくしてなければいいのだが。

言語が先か(行動を含めた)文化が先か、はすでに幾度も言語学で採りあげられているテーマでもある。現在では、どちらが先か、ではなくて、相互に関連をもって形成されていくと考えることが多い。そうであれば、やはり言語表現は表現だけにとどまらず、思考や行動にもかかわってくることになる。

二〇二〇年四月十六日に全国を対象とした緊急事態宣言が出された。それから少したった頃からNHKのアナウンサーがニュースなどの終わりに「今日もみなさん不自由をこらえてご苦労様でした。みなで乗り切りましょう」というようなことを言うようになった。すでにニュース報道は終わっているということなのだろう。しかし視聴者側からみれば、次の番組になつてはいないので、まだNHKのニュースは終わっていない。毎日、新型コロナウイルス関連のニュースを伝えているアナウンサーがそう言いたくなる気持ちはもちろんわかるし、それを自然なことと受け止める人も多いだろう。また、そのことばで励まされるという人ももちろんいたと思う。

しかし、ニュースという、客観的であることをもつとも求められるであろう情報番組の枠組みの中に、それを伝えている人の個人的な思いや考えが濃厚に入り込んでいくようにもみえる。ニュースを見ている人の立場もさまざまだから、それぞれの人の「具体的な今日」はみんな異なるといつてよい。そして「個人的な思いや考え」はそれぞれの「個体」によつて異なる。それぞれの「個体」はそれぞれの具体性の中で生きている。それぞれの「個体」が共有できる思いや考えもあるが、できないものもある。そういうことも考える必要がある。これを「逸脱」というのは言い過ぎかもしれない。しかし、小さな「逸脱」が積み重なることで大きな「逸脱」を許す、大きな「逸脱」は小さな数多くの「逸脱」をうみだす、<sup>C</sup>そうしているうちに、方向を見失い、「道筋」を見失うのではないだろうか。

四月二十五日の『朝日新聞』朝刊(特設C)には「追い込まれた人 支援したい」という見出しの記事が載せられている。記事には「新型コロナ、主なできごと」という小見出しのもとに、十七日から二十三日までの一週間のできごとがまとめられている。

十七日 政府が全世帯に配る布マスクの配達が始まる

十八日 国内での感染者数が一人を超えた

二十日 感染者の濃厚接触者の定義、「発症二日前以降」に変更

二十二日 長崎港に停泊中のクルーズ船で、乗員33人の感染が判明

東京都が休業要請に応じた業者に支給する「協力金」の申請受け付けを開始

二十三日 俳優の岡江久美子さんが新型コロナウイルスによる肺炎で死去。63歳だった

政府は全国の知事に、スーパーなどに対し入場制限を要請するよう求めた

軽症患者は宿泊施設での療養が基本。厚生労働相が方針示す

十八日「国内での感染者数が一人を超えた」が目をはく。十七日は「東京が始まる」であったのに、なぜここは「超えた」なのか。この「夕」は過去をあらわしているだけではなく、「超えてしまった」というような「書き手」とらえかた、気持ちをあらわしているのではないか。そして、二十三日の「63歳だった」にも「まだ六十三歳だったのに」という「書き手」の気持ちが反映していると思われる。一つ一つの文の終わりも、動詞ル形「始まる」「示す」、動詞夕形「超えた」「求めた」、体言止め「変更」「判明」「開始」「死去」と揃そろっておらず、「書き手」が自分の気持ちを抑えられないままに記事をまとめているようにみえる。

「先まわりする表現」と小題を付けたが、先まわりするのは、表現というよりも「書き手」の気持ちで、そういう「心性」メンタリティが広がっていることを感じる。それは時に過剰であり、場合によっては押しつけがましい域にまで入り込み、大袈裟おおげさに見えたりもする。そして、先まわりすることに意を用いることによって、表現そのものが上滑りなものに感じられたりすることもある。

(今野真二『うつりゆく日本語をよむ——ことばが壊れる前に』による)

(注)

聞蔵Ⅱ——過去の新聞記事を検索できる朝日新聞社のデータベース。

動詞ル形——動詞の終止形のこと。

動詞タ形——動詞に助動詞「た」がついた形のこと。

問一 傍線部A「先まわり」とあるが、著者はどのようなことを指して「先まわり」と言っているのか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問二 傍線部B「やる気スイッチ」という表現」に問題があると考えるのは、著者が言語表現のどのような特徴をふまえているからか。本文の例に即して九十字以内で説明せよ。

問三 傍線部C「そうしているうちに、方向を見失い、「道筋」を見失う」とはどういうことか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問四 著者は、この文章で、いくつかの言語表現に対し、「先まわり」していると述べている。著者が述べる「先まわり」する表現の問題点を、本文に即して百五十字以内で答えよ。